

宝慶寺末寺旧蹟佐開白蔵庵

伊 藤 秀 真

一 はじめに

福井県大野市の宝慶寺は、渡來僧寂円（一二〇七—一二九九）が、弘長元年（一二六一）に銀椀峯の麓に入り、大檀那伊自良氏の外護を受けて伽藍を成就したことに始まる。宝慶寺の世代は、寂円を派祖とする「寂円派」が、宝慶寺の開創以後、嗣続していた。しかし、宝慶寺十二世靈儒（生卒年不詳）以降の宝慶寺の世代には、法系を不詳とする世代が多く、「寂円派」の法が続いているとは断定できな⁽¹⁾い。

宝慶寺の世代によって、宝慶寺の周辺地域に宝慶寺の末寺が開創されている。現在、住持者のある宝慶寺の末寺

宝慶寺末寺旧蹟佐開白蔵庵（伊藤）

は、伽藍を伴い、興隆している⁽²⁾。伽藍が現存していない宝慶寺の末寺は、廃寺となり、所在地が特定できない寺院もある。

さて、大野市の佐開地区^{さびらき}は、大野市街から南東に直線距離にしておよそ八キロメートルのところであり、四十有戸の一集落を形成している。佐開は、「宝慶寺寺領目録」⁽³⁾（宝慶寺十五世如忻撰、一五〇四年）に、

一、佐開地頭方 壹段分米壹石 開元年五月廿日
桑原次郎右衛門尉定久寄進

とあり、明応六年（一四九七）には、宝慶寺の寺領であった。天正の兵乱で、寺領が悉く没収されたが、次に示した福井藩主松平昌親（二六〇—一七一）と、松平綱昌（二六六一—二六九九）の文書（宝慶寺文書）から、松平

宝慶寺末寺旧蹟佐開白藏庵（伊藤）

氏が、佐開を宝慶寺の寺領として認めている。

〔松平昌親安堵状〕（一六七五年成立）

大野郡木本庄宝慶寺領佐開村之間、其高五拾石、奉如先視全
収納不可有、相違者也、

仍如件

延宝三乙卯年十二月日昌親（印）

〔松平綱昌安堵状〕（一六七七年成立）

大野郡木本庄宝慶寺領佐開村之間、其高五拾石、如先視全収
納不可有、相違者也、仍如件

延宝五丁巳年十二月日綱昌（印）

佐開に再建されたという、宝慶寺の末寺とされる白藏庵
の存在が、諸資料に記録されている。筆者が白藏庵につい
て把握したのは、『福井県大野郡誌』⁽⁵⁾の、

〔寺社創記〕牛塚は白藏庵の西一町にあり土人此の塚を祭る
や感応あり

白藏庵 塔頭、万霊塔の南にあり中
古の建立白山権現の別当 ……犬塚は牛塚北十餘歩にあり

（按）に白藏庵跡は、現今の学校敷地ならむ、又、犬塚は近
世移せしものか。

という記述による。この内容は、『宝慶寺誌』⁽⁶⁾に、

〔寺社創記〕に白藏庵は塔頭なり。万霊塔の南にあり、中古
の建之、白山権現の別当とある。白山権現は現在宝慶寺村の
氏神白山神社で往昔寂円禪師が弘長四年鎮守として建てたも
のである。「由緒書」に一曹洞宗祖道元禪師、大宋国天童山
滞在ノ際、白衣神人ト現ジテ、助筆及守衛ヲ蒙ル故ニ宝慶寺
開祖寂円和尚弘長四年中鎮守トシテ是ヲ祭ル、後ニ人民住居
ニ随ツテ宝慶寺村産土神トナス」とある。

又後世佐開村に再建せられたことにつき、「白藏庵記」に
「天保辛卯年（二年）七月十九日宝慶寺四十三世枯木吟龍大
和尚開基、文久三癸亥三月五日当庵本尊三体仏入仏供養、施
主岩井氏、再建玉貞山代（姓坂下氏宝慶寺生）敬記」

と詳しく、白藏庵の略縁起が記されている。

白藏庵は、宝慶寺村の鎮守白山神社の別当として、寂円
が、弘長四年（一二六四）に開創したとされる、宝慶寺の
塔頭寺院であった。庵名は、白山神社に由来していると推
定できる。宝慶寺の参道に、三界万霊塔が安置されてい
る。これが、「寺社創記」の万霊塔に相応する。三界万霊
塔の南、白山神社の東側には、広大な敷地がある。ここ
に、明治七年（一八七四）から昭和四十五年（一九七〇）
まで、小学校が存在していた。小学校があつたために土地

が開かれたと解することもできるが、既に敷地があり、開校を可能にしたと考えることもできる。位置関係を踏まえると、白山神社の東側の敷地は、『福井県大野郡誌』にみられる記録（按）の通り、白蔵庵の跡地と推定される。ここから、白蔵庵が佐開に移転した経緯は不詳である。白蔵庵は、宝慶寺四十三世枯木吟龍（*一八四二）を開基、泰嶽貞山（一八一七—*）を再建主として、天保二年（一八三二）に佐開で再建された。貞山は、吟龍の門徒である。文久三年（一八六三）には、本尊の入仏供養が厳修されたという。白蔵庵が宝慶寺世代によって再興した寺院ならば、宝慶寺の末寺と位置付けられる。但し、大正以降の『曹洞宗寺院名鑑』⁸⁾に、白蔵庵の記載がなく、白蔵庵の実態は掴めない。『宝慶寺誌』では、白蔵庵を宝慶寺の末寺としてみているが、所在を不明としている。また、「白蔵庵記」には、白蔵庵の再建時期が明記されている。しかし、この書の存在は不明であり、典拠が明らかでない。『大野市史』には、

道場

真宗大谷派（手次寺は大野市明倫町の最勝寺）の道場があ

宝慶寺末寺旧蹟佐開白蔵庵（伊藤）

る。この他に庵寺があるが、庵主不在のため集落の管理下にある。

と、佐開の道場（寺院）が記されている¹⁰⁾。真宗大谷派の道場の他に、庵主不在の庵寺が存在していることが分かる。

この庵主不在の庵寺は、白蔵庵のことを指しているのか、庵名が記されていないので、結びつけられない。宝慶寺の末寺である、大野市明倫町の曹源寺と大野市木本の光徳寺は、開創時と現在の所在地が異なっているように、白蔵庵が移転し、佐開に存在していない場合もある。また、大野市上黒谷の大光寺や大野市平沢領家の平沢寺、宝慶寺門前の新豊院・瑞泉庵の如く、伽藍がなくても、寺名の地名が字として残っているので、およその寺の所在地を掴むことができる¹²⁾。

白蔵庵は、果たして佐開に現存しているのだろうか。そして、『大野市史』の、地区で管理されている庵寺とは、白蔵庵のことなのだろうか。現地調査を行い、白蔵庵の存在を検証したい。

二 什物について

佐開の東方には、小荒島岳がある。荒島神社の東側は、小荒島岳の山麓緩斜面となっている。荒島神社の北東に、西面を向き一字の御堂が造立している。この堂宇を佐開では「庵寺」と称して、区長が管理している。この「庵寺」は、『大野市史』の庵寺のことであろうか。この庵寺の所在地の地名は、字が「上宅地」⁽³⁾である。地名と寺名は一致していない。しかし、現在、集落の管理下にあり、庵主不在なので、『大野市史』の庵寺と状態が酷似している。はじめに、この堂内に収蔵されている什物の状況を把握するため、ここで明らかにすることにした（仏像・絵図の成立年不詳・スケールは最大値のみ）。

一、仏祖像（計十体）

釈迦三尊像（釈迦堂の本尊カ）

釈迦如来坐像（木像）

高さ三四・〇センチ（光背部を入れると五五・七センチ）、横幅二七・〇センチ、奥行き一七・八センチ（台座を除く）

文殊菩薩坐像（同右）・普賢菩薩坐像（同右）

高さ二四・五センチ（光背部を入れると五五・七センチ）、横幅一七・四センチ、奥行き一四・〇センチ（台座を除く）

釈迦如来立像（铸造）

高さ五二・〇センチ（光背部を入れると六四・〇センチ）、横幅一八・〇センチ、奥行き一一・五センチ（台座を除く）

釈迦如来坐像（木像）

高さ二一・〇センチ（光背部を入れると三三・五センチ）、横幅一七・六センチ、奥行き一三・〇センチ（台座を除く）

地藏菩薩坐像（石像）

高さ二六・〇センチ、横幅一五・五センチ、奥行き八・八センチ

祖師坐像二体（道元と吟龍カ・木像）

高さ四〇・五センチ、横幅二六・〇センチ、奥行き一六・〇センチ
（曲縁部）高さ五六・〇センチ、横幅三一・五センチ、

奥行き二一〇・〇センチ

文殊菩薩坐像（木像）

高さ三二一・〇センチ、横幅二八・七センチ奥行き二一・〇センチ

水子地藏立像（木像）

高さ六三・〇センチ、横幅二二・〇センチ、奥行き二一・五センチ（台座を除く）

一、絵図

〔達磨東渡図〕

〈総丈〉 縦一一九・〇センチ、横三二・五センチ

〈紙本〉 縦七一・一センチ、横二四・五センチ

〔涅槃図〕

〈総丈〉 縦一八〇・三センチ、横七二・〇センチ

〈紙本〉 縦九九・三センチ、横五八・〇センチ

一、扁額

〔釈迦堂〕（横額一面）

〈総丈〉 縦四〇・五センチ、横九四・五センチ

〈紙本〉 縦三三・二センチ、横六八・五センチ

一、寄進名列板

宝慶寺末寺旧蹟佐開白藏庵（伊藤）

〔釈迦堂再建寄進名

列〕（木製・板十七枚）

縦一一二・五センチ、横二五一・〇センチ

ンチ

〔寄附者名列〕（木

製・板五枚）

縦七〇・〇センチ、

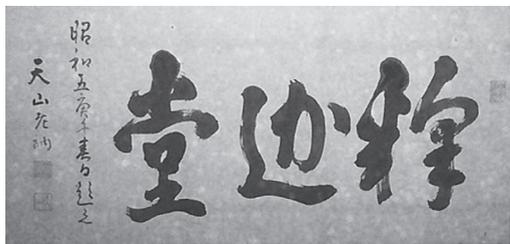
横六八・〇センチ

右記の他、堂内には木製の位牌が安置されていた。

堂内の什物について特記すると、貞山代の位牌の刻字

から、文久三年（一八六三）三月、本尊三体を安置し、三月十二日に入仏供養が行われたことが明記されている。これは、「白藏庵記」に記されている、本尊入仏の時期より七日後のことであり、合致していない。

釈迦如来立像の仏龕左側面には、昭和五十四年（一九七九）五月に、米村豊吉氏が寄進したと記されている。



白龍天山筆「釈迦堂」

宝慶寺末寺旧蹟佐開白藏庵（伊藤）

祖師坐像二体の人物は不明だが、ここが白藏庵と関連する御堂ならば、曹洞宗開祖の道元（一一〇〇—一二五三）と、白藏庵を再建した吟龍と推察される。二体とも、曲祿に坐る頂相彫刻である。曲祿の一部に破損がみられる。曲祿には、「文久二戊（一八六二）八月施主木本村九左エ門」の刻字がある。

水子地藏立像の仏龕左側面には、本多貞七氏が寄進したと記されている。

涅槃図には、画像の収納箱がある。ここに筆書があり、



白藏庵釈迦堂
（平成23年4月21日筆者撮影）

昭和五十八年（一九八三）七月に、井尾藤兵衛氏が改装、寄進したと記されている。^⑤

「釈迦堂」の扁額は、昭和五年（一九三〇）の、宝慶寺五十世白龍天山^⑥（一八六四—一九四一）による墨蹟である。

庵寺に収められていた「釈迦堂」の扁額と「釈迦堂再建寄進名列」から、この御堂は釈迦堂であり、昭和五年に再建されたことが分かる。「釈迦堂」の揮筆は、天山によるもので、宝慶寺入院中の書であった。ここから、宝慶寺との関係が窺える。

三 釈迦堂の位牌と宝慶寺過去帳

佐開の西南西、直線距離にしておよそ一キロメートルのところ、平沢領家地区がある。平沢領家には、宝慶寺の末寺とされる平沢寺があった。堂宇は現存していないが、江戸時代中期頃から昭和初期までの間、庵寺を再建した、釈迦堂が存在していたようである。^⑦佐開の庵寺が白藏庵であり、平沢寺と同じような経緯を辿ったならば、衰微した後、釈迦堂（庵寺）として再建したことが推察される。

次に、釈迦堂本尊の入仏した時期が、堂内の位牌から分

かるように、ここで、釈迦堂の位牌を一瞥したい。また、近年の文化財調査によって明らかになった「宝慶寺過去帳」（宝慶寺文書・江戸後期成立）に、白蔵庵と関わりのある戒名が筆録されていた。白蔵庵に関連する人物から、白蔵庵の状況を把握できる可能性があるので、この文書も取り上げることにした。

1 釈迦堂の位牌

釈迦堂にある位牌（表牌面）の戒名を列記すると、次の通りである。

日域初祖仏性伝東国師道元大和尚 宝慶四十三世当庵開山枯
木吟龍大和尚禪師 宝慶四十三世枯木吟龍大和尚 宝慶四十
五世大龍章鱗大和尚禪師・孝顕二十八世仏天応龍大和尚禪
師 当庵中興泰嶽貞山尼首座位 見外慧得庵主 今上皇帝聖
寿無量 釈之西入居士・釈尼妙信童女・釈尼妙了大姉・釈尼
妙順童女 釈之観良居士・釈尼妙幽信女・釈尼妙良信女・釈
尼妙恵信女 釈尼妙了信女・真入院成円信士・真入院随円信
士 大安至道信士・春岩宗英信士・絶妙無学尼上座・松室貞
音尼上座・了室令清信女・祥山千峯尼首座・悦屋妙喜信女

このうち、道元、見外慧得庵主、釈之西入居士等四名の

宝慶寺末寺旧蹟佐開白蔵庵（伊藤）

各位牌裏には、貞山代と位牌の時期を指す刻字がある。

位牌には、宝慶寺との関係が深い僧名もみられる。吟龍の位牌（二柱）、宝慶寺四十五世大龍章鱗（*一八六一）と福井市孝顕寺二十八世仏天応龍（*一八五七）、そして章鱗と応龍の牌面裏には、曹源寺二十六世法山大輪（*一八六四）のことが記されている。

すべての位牌に、示寂年の刻字はみられないが、このうち、生卒年が最も早いのは道元である。道元を除き、示寂年が明らかで示寂年時が早いのは、春岩宗英信士（*一八三八）であった。白蔵庵の再建については後述するが、ここに安置されている位牌の殆どは、「白蔵庵記」の白蔵庵が再建されたとする、天保二年よりも後年のものである。

2 宝慶寺過去帳

「宝慶寺過去帳」から、白蔵庵に関する人物を抜粋した。次の戒名が確認できる。

権応実音上座 龍心養朔座元 白蔵庵中興説道庵主 前白蔵
一音聞了上座 仏母鑑住梅林瑞光上座

これらの戒名は、全て「白藏庵記」の白藏庵が再建されたとする、天保二年以前の人物であった。「宝慶寺過去帳」には、戒名の他、人物についての事項が付記されている。次に、「宝慶寺過去帳」の白藏庵に関する人物について、特記すべきことを挙げたい。

この中で示寂年時が最も早い、権心実音上座(*一五三三)の事項には、「白藏庵先住也」と付記されている。龍心養朔座元(*一六九五)にも、「月牌入、白藏庵先住也」とあり、白藏庵の住持であったことが解る。

白藏庵中興説道庵主(*一七八七)の事項には、「祠堂入日牌金三両一歩入」と付記されている。

前白藏一音聞了上座(*一八〇五)の事項には、「於仏母院門前市左衛門隠居也」と記されている。戒名の前に「前白藏」とあるのは、聞了が白藏庵に住持していたため、「前住」と称されたことが窺える。

仏母鑑住梅林瑞光上座(*一八三〇)の事項には、「若州気山産四十一世和尚徒、享和三亥年八月於白藏庵終」とあり、ここに白藏庵のことが記されている。「四十一世和尚」とは、宝慶寺の世代を指すのだろうか。寛政二

年(一七九〇)に、仏母院千了(生卒年不詳)が「仏母院歴代牌面写」(宝慶寺文書・一八〇三年成立)を著している。この「仏母院歴代牌面写」には、享和三年(一八〇三)四月、瑞光が謹諾して宝慶寺四十二世大轟黙堂(*一八一六)に、この謄写本一冊を呈出したことが記されている。宝慶寺との関連から、「四十一世」という過去帳の付記は、宝慶寺四十一世建國成寅(徳)(*一八一三?)を指し、瑞光は、成寅の門徒である。

釈迦堂には、宝慶寺の世代(吟龍と章鱗)と貞山の位牌が安置されていた。吟龍と貞山は、「白藏庵記」から、白藏庵の再建に携わっていることが認められる。「宝慶寺過去帳」には、白藏庵に入院した人物の記録が含まれていた。この章でそれぞれの内容を吟味した結果、釈迦堂は、宝慶寺の世代との関係が明らかであり、白藏庵の一字と断定できる。

四 白藏庵の再建と仏母院

前章で「宝慶寺過去帳」について触れたことだが、仏母院鑑住瑞光の事項には、白藏庵の記載があった。また、

「仏母院歴代牌面写」から、瑞光が成真の門徒であることが分かった。このことから宝慶寺は、白蔵庵と仏母院の両寺院との関係が浮かび上がる。

仏母院とは、明治三十九年（一九〇六）に寺籍編入をした⁽¹⁹⁾、宝慶寺二十八世寂心雲波⁽²⁰⁾（二六二六一―一六九九）を開山とする、勝山市片瀬の仏母寺のことである。仏母寺は、宝慶寺の末寺であり、雲波以後も、宝慶寺の世代が住持している⁽²¹⁾。

近世、宝慶寺に關係する寺院について、「戸籍諸事記」（宝慶寺文書・明治時代成立）に纏められている。次に、「戸籍諸事記」に収められている、白蔵庵と仏母院の内容を抜粋し、宝慶寺とこの両寺院との関係から、白蔵庵の再建時について検討したい。

右

小本山 越前国大野郡佐開村

一 宝慶寺庵室 白蔵庵

宗祖道元国師第四十五世法孫吟龍和尚

文政三年庚辰九月創立

住尼 貞山

足羽県管轄越前国大野郡

宝慶寺村農久姉 壬申五十六歳

宝慶寺末寺旧蹟佐開白蔵庵（伊藤）

明治十二年十二月六十三年二月
天保八丁酉八月十五日右小本山宝慶寺ニ於テ得度
同曆十二辛巳八月ヨリ右白蔵庵ニ入住修学

足羽県管轄越前国大野郡

宝慶寺村農久平次女

法弟尼 実明 壬申三十二歳

嘉永三年庚戌四月八日右小本山宝慶寺ニ於テ得度右白蔵庵
寄留修学 明治十二年十二月三十七年五月
法弟尼 智声尼

木本村松田産七生安政六年末五月十五日得度

以上尼三人

一 境内租税地 壹及五畝歩
一 檀家無之

右

足羽県管轄越前国大野郡片瀬村

小本山

一 宝慶寺平末

大師山 仏母院

宗祖道元国師第三十世法孫雲波和尚

正保尤甲子八月創立

宝永二年

足羽県管轄越前国大野郡 住僧 戒岳

宝慶寺末寺旧蹟佐開白藏庵(伊藤)

宝慶寺村農伝藏三男 壬申二十一歳

文久三年亥二月十五日石小本山宝慶寺ニ於テ得度并修学

以上僧壹人

一境内租税地三及寺畝十歩

一檀家無之

この文書の両寺院の記録には、明治五年(一八七二)に筆録されたことを示す壬申の干支が、所々に記されている。白藏庵には「宝慶寺庵室」、仏母院には「宝慶寺平末」とあり、ともに宝慶寺の末寺であった。ここには、当時の寺格も明らかにされている。明治期の寺院級階は不明だが、大正初期では、一、四等の「法地」の次に、「平僧地」「堂庵」「等外地」と分類されている²³⁾。これに準じているなら、白藏庵は「堂庵」と同格の規模である。

白藏庵の開創者は吟龍、仏母院は雲波であり、寺伝や文書と一致する。この文書での世代表記は、道元―懐奘と続き、宝慶寺開山寂円を三世と数え、吟龍は四十五世、雲波は三十世として示されている。白藏庵の開創年は、文政三年(一八二〇)九月とある。「宝慶寺過去帳」の瑞光の事項には、享和三年(一八〇三)八月に、白藏庵が途絶えた

ことが付記されているので、開創されるまでの十七年間は空白期となる。

一方、仏母院の開創年は、正保元年(一六四四)八月とあるが、見せ消ちで宝永二年(一七〇五)と、左に改めている²⁴⁾。これは何を意味しているのか不明だが、仏母寺の開創年時は諸説ある。仏母院には、戒岳(一八五二―一九一八)が住していたと「戸籍諸事記」に記録されている。しかし、仏母寺の世代には、戒岳の名が含まれていない。「御朱印之写当山開基以来請書」(宝慶寺文書・明治時代成立)には、戒岳が仏母院の十九世であったことが示されている。これは、これまでの鑑住を含めた世代のことを意味するのだろうか。

ここで、「戸籍諸事記」の内容を踏まえて、白藏庵が再建されたことについて考察したい。釈迦堂の位牌には、吟龍のことを「当庵開山」と称している。これは、享和三年以降、途絶えていた白藏庵を、吟龍は佐開に移転し、開創させたことを意味していると考えられる。また、位牌には、貞山のことを「当庵中興」と称している。白藏庵境内地の北側に、貞山の石塔が建てられている。この石塔に

宝慶寺末寺旧蹟佐開白藏庵(伊藤)

白藏庵には、貞山、実明(一八四三―*)、智声(一八五九―*)の尼僧三名の他、伯道(一八七三―一九四八)が在籍している。「戸籍諸事記」の中に、明治二十三年(一八九〇)の「改名願」が収録されている。「改名願」には、明治二十三年三月二十日に、仏山戒鱗(一八三五―一九〇八)を受業の師、貞山を養母として、マキという女性の名を、泰嶽伯道に改名するよう請願している内容が含まれている。このようにして、貞山をはじめとする尼僧は、吟龍会下の宝慶寺世代に就いて、得度をしている。この尼僧四名の伝法の関係は明らかではない。

ところで、宝慶寺の什物「大回向」の祠堂諷経には、「泰嶽伯道尼和尚」と、伯道の名が記されている。ここで、伯道の道号が、貞山と同じ「泰嶽」であることに気付く。「戸籍諸事記」の貞山、実明、伯道の三者には、共通して「泰嶽」を名に冠して記されている。貞山から続けて、同じ「泰嶽」の道号が付けられているのは、疑問である。

「法類名簿」には、阿弥陀寺の赤梢龍鱗(一八五八―一九一五)や曹源寺の徳山龍輝(*―一九四六)等、戒鱗の

門徒の名と住職地が併記されている。ここに、

岐阜県郡上郡五町村

悟竹院前住職 大嶽戒岳

と、戒岳の名に、貞山と同じ「大嶽」が付けられていることが認められる。だが、「法類名簿」の人名は、道号を用いた記名で統一されていない。つまり、戒岳が「泰嶽」を道号として用いていたとは考えにくい。

岐阜県郡上市の悟竹院十八世に、多聞戒岳が入院している。「法類名簿」の記録には、同名の戒岳が、悟竹院の前住職として、住していたことが記されている。悟竹院の多聞戒岳は、悟竹院の位牌から「法類名簿」の戒岳と生存年が同時期であり、同一人物と推察される。戒岳は、「多聞」を道号としていたことになる。

勝山市元町地区にある神明神社の東側に、梅花庵がある。この庵寺の開創年は不詳だが、梅花庵は、吉峰寺第五世重興大道仏心(一八六七―一九一四)が開創したことに始まる。筆者は、一昨年秋頃まで、泰嶽伯芳氏(一九一一―二〇一〇)が、梅花庵の庵主であったことを知った。伯芳にも貞山と同じく、名に「泰嶽」が付けられている。

〔梅花庵世代〕 開山大道仏心 二世泰嶽伯道

三世春山伯芳

(泰嶽)
四世活導慈芳

右に、梅花庵の世代を記した。梅花庵二世は、貞山の養女として白蔵庵に修学した伯道である。梅花庵には、伯道の養女である伯芳が三世として、伯芳の養女である慈芳（*—一九九一）が四世として入院している。伯芳と慈芳には、戒岳と同様に道号といえるか断定できないが、名に「泰嶽」を冠した継承もみられる。梅花庵の世代は、伯道以降、貞山の家系を継いでいるので、白蔵庵と同様な参学道場であったと捉えることができる。伯芳の得度・伝法については不明である。しかし、慈芳の三物（筆者所蔵）によると、慈芳は、仏心の法孫にあたる大乘院四世活水龍童（*—一九七二）に就いて、これを伝受したことが記されている。つまり、貞山から連続と「泰嶽」の二字が用いられているが、宝慶寺との関係を表すために附けられているのではない。

白蔵庵の修学者と梅花庵の世代にみられる「泰嶽」の二字は、貞山から家号のようにして用いたことに始まり、およそ二百年に及び、継承されている。白蔵庵には、宝慶寺

宝慶寺末寺旧蹟佐開白蔵庵（伊藤）

の世代のもとで得度した修学者がいることから、宝慶寺との関係が明らかであるが、梅花庵の伯芳以降の世代と、宝慶寺の世代との関係は確認できない。

六 おわりに

ここで、白蔵庵について明らかになったことを整理すると、次の点を挙げることができる。

(ア) 寂円が、弘長四年に白山神社の別当として、万霊塔の南の地に、宝慶寺塔頭の白蔵庵を建立したといわれる。

(イ) 天正の兵乱で、宝慶寺の伽藍は焼かれ、同時に、白蔵庵も焼失した可能性がある。「宝慶寺過去帳」によると、十七世紀末には、白蔵庵が復興している。また、十八世紀には、説道が、白蔵庵を興隆させた。

(ウ) 説道以降、白蔵庵の伽藍の状態は不明である。その後も度々、白蔵庵が再建復興している。再建時期が記録によつて明らかかな年時は、吟龍が再建した文政三年九月と貞山が再興した天保二年七月、そして天山が釈迦堂を再建した昭和五年である。

(エ) (ウ)の、文政三年に再建する以前、享和三年に白蔵庵が衰微している。この頃まで、白山神社の東側に所在していたことが考えられる。その後、吟龍が、佐開に移転開創し、貞山によって発展させた。

(オ) (ア) (エ)によって、『大野市史』に記載されている庵主不在の庵寺とは、宝慶寺の鎮守白山神社の別当、白蔵庵が移転した伽藍のことであり、白蔵庵の一字、釈迦堂のことを指している。

(カ) 伯道が修学した後の、白蔵庵の状況は不明である。伯道は、後に梅花庵に転じている。梅花庵の世代は、名に「泰嶽」を冠して継承していることから、梅花庵は、白蔵庵と同様な参学道場であったことが窺える。

白蔵庵が佐開へ移転したのは、寺院機能を拡大する目的があったからではないだろうか。釈迦堂東側の境内地には、伽藍があったと推測できる礎石が残っている。釈迦堂には、幾つもの仏祖像が什物として纏められている。貞山が白蔵庵を再興した当時は、礎石の範囲から、開山堂や僧堂など、幾つもの堂宇を備えていたことが推測でき、寺院の行事を概ね厳修することができたと考えられる。しか

し、何故、白蔵庵の伽藍が整備された後、伯道は梅花庵に移り、白蔵庵が衰微したのだろうか。今後、検討すべき問題である。

末筆であるが、本稿で取り上げた白蔵庵と梅花庵を調べるにあたって、佐開区長の谷脇一浩氏、勝山市元町の中西恵美子氏に、とてもお世話になりました。お礼申し上げます。

註

(1) 拙稿「宝慶寺世代の法系と末寺の関係」〔印度学仏教学研究〕五九―二、二〇一一年〕一九六一―一九九頁。

(2) 同右。

現在、宝慶寺の末寺は、曹源寺、徳嚴寺、光徳寺、阿弥陀寺、仏母寺の五箇寺である。

(3) 大野市史編さん委員会編『大野市史』(一) 社寺文書編(大野市役所、一九七八年) 五七九頁。

(4) 本多喜禪『宝慶寺誌』(大野市宝慶寺誌刊行会、一九五八年) 六九―七〇頁。

天正の兵乱で、宝慶寺の伽藍が一切焼き払われ、門前の新豊庵・瑞泉庵も焼失したこと、そして、寺領が没収されたことが記されている。しかし、典拠が不明である。

- (5) 大野郡教育会編『福井県大野郡誌』（臨川書店、一九二一年）九〇五頁。
- (6) 本多前掲書、九〇頁。
- (7) 大野市史編さん委員会編『大野市史』八、地区編（大野市役所、一九九一年）三六五b。
- (8) 『曹洞宗寺院名鑑』は、峯玄光編輯（国書刊行会、一九一三年）、中川豊舜編輯（曹洞宗務院、一九三七年）、成田大兆編輯（曹洞宗務院、一九四一年）、宇野義天編輯（曹洞宗宗務庁、一九五〇年）、西沢浩仙編集（曹洞宗宗務庁、一九五七年）を参照。
- (9) 本多前掲書、九〇頁。
- (10) 大野市史編さん委員会編前掲書（一九九一年）、四一三a。
- (11) 同右、三六b―三七b、三八b―三九a。
- (12) 大光寺は、上黒谷耕地に「大故地」と、音韻変化した地名が字として残っている（『大野市史』八、二九九頁）。
- 平沢寺は、平沢領家山林に「寺山」として地名に残っている（『大野市史』八、三九七頁）。
- 新豊院と瑞泉庵は、『宝慶寺寺領目録』（一五六六年成立）に、寺名が明らかである。また、宝慶寺山林小字に「新豊谷」、「瑞泉谷」と、地名が字として残っている（『大野市史』八、三六一―三六二頁）。「新豊谷」は、宝慶寺の法堂がある「笠松」の東方部、「瑞泉谷」は、「笠松」の西方部に位置する。
- 宝慶寺末寺旧蹟佐開白藏庵（伊藤）
- (13) 大野市史編さん委員会編前掲書（一九九一年）、四〇七―四〇八頁。
- (14) 釈之西入居士等四名の位牌の裏には、本尊三体が、土内喜右エ門の寄進によることが記されている。貞山の位牌の裏には、入仏供養が、三月十二日に行われたことが記されている。
- (15) 釈之觀良居士等ら四名の位牌の裏には、涅槃像の施主が筑紫妙願であることと、この位牌は貞山代のものであることが刻字されている。
- (16) 宝慶寺五十世、永平寺六十九世、総持寺独住一〇世、三重金光寺十八世、同光明寺二十三世、同四天王寺四十七世、同弘善寺六世、朝鮮博文寺に住持。
- (17) 本多前掲書、八九頁。
- 平沢寺は、明治初年から無住となり、昭和初期には保護が行き届かなくなつたという。
- (18) 宝慶寺四十一世、滋賀正伝寺十二世、同清水寺二世。宝慶寺伝では、文化十年（二八一三）九月一日示寂。正伝寺伝では、文政九年（二八二六）三月十日示寂説と、文化十四年（一八一七）九月一日示寂説とがある。
- (19) 「仏母寺一件関係書類」（宝慶寺文書、一九〇四年成立）の中に、寺籍編入許可願が収められている。ここには、仏母寺が開創してからの、宝慶寺との関係について記されている。

宝慶寺末寺旧蹟佐開白藏庵（伊藤）

る。

(20) 宝慶寺二十八世、徳巖寺二世、仏母寺開山、滋賀正伝寺鑑住。

(21) 仏母寺の世代は、左のように、宝慶寺の世代が仏母寺に入院していることが分かる。仏母寺伝と「仏母院歴代牌面写」から、特に六世以前の世代で差異が認められる。

仏母寺伝の世代	
開山	寂心雲波
二世	巖翁鈞睡
三世	温海慧珍
四世	龍堂即門
五世	□□潭龍
六世	□□堪念
七世	仏山戒鱗
八世	耳円海音
九世	無涯大宙
十世	大覚禪雄
...	...

「仏母院歴代牌面写」による世代	
開山	寂心雲波
二世	巖翁鈞睡
三世	□□東海
四世	龍堂即門
五世	□□潭龍
中興	一翁貞山
六世	温海慧珍
七世	高知海
...	...

（太字）宝慶寺からの転住）

(22) 峯編輯前掲書。

(23) 正保元年の干支は甲申であり、甲子は誤りである。

(24) 仏母寺の開創年について、仏母寺山門前の立札には元禄年間（一六九〇年ころ）創建とあり、「戸籍諸事記」と異なる。

る。また、宝慶寺文書であっても、「御朱印写当山開基以来請書」には正保年中（一六四四—一六四八）、「仏母寺一件関係書類」には宝永二年五月晦日（雲波の弟子本雄によって創建）とあり、仏母寺の開創年を断定することができない。「宝慶寺寺領目録」（一五六九年成立）の中に、仏母院納張が収録されている。仏母院は、この納帳が収録された当時、既に存在していたことになるので、十六世紀以前の開創といえないだろうか。

(25) 拙稿前掲論文（一九九 a）から抜粋し、加筆修正を施した。

(26) ここに、当時の白藏庵の所在地「越前国上庄村字佐開卅二番地」が示されている。

(27) 福井梅花庵開山、同吉峰寺五世重興、同大乘院開山、同禅師峰寺開山。

(28) 伯道は湯口、伯芳は木戸、慈芳は上坂の姓から、泰嶽に改名している。泰嶽の姓は、道号として用いることが口伝で伝えられている。そのため、伯道以降、梅花庵の歴住に相承している。伯芳には春山、慈芳には活導の道号もある。しかし、これらは後から附けられたものである。

『曹全』大系譜一、一三〇 d f には、伯道から慈芳に至る、梅花庵の世代名が連なっている。慈芳は、龍童の法を継承していることから、伝法の関係で連なっているとはいえない。

(29) 福井大乘院四世、同禅師峰寺五世。